

## 中央ヨーロッパの可能性

大津留 厚 (神戸大学)

現在はチェコ共和国とポーランドの国境近く、チェコ共和国側にナーホトという町がある。チェコ共和国は歴史的にたどればボヘミア王国にいたる。そのボヘミア王国はボヘミア、モラヴィア、シレジアの三つの地方から形成されていた。現在のナーホトから一山越えたところに位置するポーランドとの国境は、もともとはボヘミア地方とシレジア地方を分けるもので、シレジア地方がオーストリア継承戦争の結果としてプロイセン領となり、のちにドイツ領となり、さらにポーランド領となって、そこには「国境」が引かれることになったが、もともとは一つの文化圏として独特の文化を培っていた。

また第一次世界大戦後、チェコスロヴァキアが成立して、チェコスロヴァキアのドイツとの国境に近い地域やオーストリアとの国境に近い地域に集住していたドイツ系の住民たちは、「ズデーテン・ドイツ人」として自分たちを意識するようになった。ミュンヘン会議の結果、ズデーテン地方がドイツに割譲された時、ナーホトはチェコスロヴァキア領にとどまり、対ドイツの最前線の役割を担うことになった。それは逆に言えば、ドイツ系住民との接点にナーホトが位置していたことを意味している。またこの地域はユダヤ人集住地域の西端として、2パーセント前後のユダヤ系住民が住んでいたと考えられる。

ナーホトに生を享けたヤン・レツェルが日ごろ目にしたと思われる市の中央広場に建つバロック式の教会は、イタリア出身のイエズス会士カロル・ルラーゴの作品だった。ヤン・レツェルは近隣のパルドヴィツェにあった工業高校を卒業したのち、プラハでヤン・コウラに建築意匠を学んだ。当時、プラハを含むオーストリア＝ハンガリーの建築を主導したのは、歴史的な様式にこだわる歴史主義に抗して近代建築とその時代に相応しい装飾を求めた分離派（セセツィオン）の運動だった。その中心にいたのがオット・ヴァーグナーであり首都ウィーンはその様相を大きく変えていた。ヤン・レツェルが師事したヤン・コウラは、反歴史主義の立場はヴァーグナーと共通しており、その時代に相応しい素材を使って、機能に即した建造物を作っていたが、装飾に関してはヴァーグナーと異なり、歴史との協調を目指していた。

ヤン・コウラの代表作は1891年にプラハで開催されたボヘミア産業博覧会場の設計だった。ボヘミアの工業力を誇示するために開かれたこの博覧会のメイン・パビリオンとなった工業パビリオンは、「22トンの鉄鋼、100万枚のガラスを用い、その中央に設けられた投光器から発せられる電光は8キロメートル先まで照らした。訪れた人たちはボヘミアの工業力に目を見張り、多色の電光で

きらめく噴水の夜景に目を楽しませ」ることになった。しかし、近代工業の産物と言えるこのパビリオンの中央に位置したのは、30メートルの高さの四つの塔で、合わせてボヘミア王冠のユリの形を表していた。

ナーホトに生まれプラハで学問的な訓練を受けたレツェルは、世紀末中央ヨーロッパ建築思想を総合していたと言えるだろう。そのレツェルが来日したのが1907年、レツェルの建築家としての名を高めたのは宮城県松島に建設したホテルだった。それは近代西洋建築に日本的な瓦を用い、寺院に見られる相輪を取り入れた建造物だった。その時の宮城県知事寺田祐之が広島県知事に異動するにあたって、レツェルを広島に招き建設させたのが広島物品陳列館（のちの広島産業奨励館）だった。しかしそれが竣工した1915年には第一次世界大戦が始まっており、レツェルは抑留されることはなかったが、「敵国民」として不遇の時代を過ごすことになる。他方で広島物品陳列館が見物する人々で埋まったのが、広島の似島に設置されていた捕虜収容所のドイツ人捕虜たちが作ったものを展示即売した時だった。見物に来た人々は、洋風の建物とドイツ人捕虜が作った展示品やお菓子を楽しみ、洋行気分を味わった。因みにこの時の出品作の中で優れたものは物品陳列館自身が買い上げ、この建物と運命を共にすることになる。

広島物品陳列館で捕虜作品の展示即売会が開かれた時、すでにオーストリア＝ハンガリーは崩壊し、レツェルの故郷、ナーホトは新生チェコスロヴァキアに属していた。レツェルはチェコスロヴァキアの商務官として祖国に尽くすことになる。しかしのちに関東大震災に遭遇して、レツェル自身は無事だったが、自身が設計した建造物の多くが破壊されて、失意のうちに亡くなった。レツェル自身は自分の設計した広島物品陳列館が「原爆ドーム」へ姿を変えることを目にするにはなかった。被爆地に凜として立つ原爆ドームの「美」は、中央ヨーロッパが生んだ傑作と言えるだろう。

私は2006年に『中央ヨーロッパの可能性』という編著書を出版した。その時の発想の一つは、クラウディオ・マグリスとアンジェロ・アロの共著『トリエステ』だった。東西ヨーロッパの壁が崩壊する少し前、1987年にドイツ語版が出された時、そこには「中央ヨーロッパ文学の首都」の副題が付されていた。この本の著者たちは、20世紀初頭にトリエステで活動した作家シピオ・スラターペルの言葉を引用して、「中央ヨーロッパ」の首都としてのトリエステを定義した。「トリエステとは何か？それはあることがわかっていながら、何であるかを決めつけることができない何ものかである。もしそれがはにかみながらも感情の中にとどまる限り、それは正真正銘存在する。しかしひとたび何かしら言葉にし、白日の下にさらすと、怪しげなものへと変わってしまう。異質の様々な文化が私たちの中で受け継がれ、響き合う。それは私の中で根を張り、一つ

になる。その一つ一つを個々に分けることはできない。」

異質な文化の一体化を中央ヨーロッパの文学としてとらえ、その真ん中（地理的に、というよりも理念として）に位置するのがトリエステである、というのが著者たちの主張である。しかし異質なものが隣り合う中央ヨーロッパは、また無数の「境界」によって分断された社会でもある。マグリスとアロの共著『トリエステ』はもともとイタリア語で出版されたが、その時の副題は「境界のアイデンティティ」だった。まさにその時、トリエステのすぐ東隣りには「東」と「西」を分かち「鉄のカーテン」が引かれていた。

ヨーロッパは現在シリアなどから流入する難民に直面して深い危機にある。まさに中央ヨーロッパの各地（ルーマニア、ブルガリア、ハンガリー）に冷戦時代の再来を思わせる鉄条網が国境に設置されている。冷戦の終結と EU への加盟で、もう一度一体感を取り戻した中央ヨーロッパ諸国が鉄条網によって分断される可能性がある。その中央ヨーロッパ自体、20世紀の歴史を通じて、その多様性を構成する重要な要素であったドイツ系（図1参照）とユダヤ系住民（図2参照）をそれぞれ事情は異なるものの失ってしまった。しかしそれでもなお異質なものが共生した中央ヨーロッパの遺伝子は引き継がれているのではないだろうか。ウィーンの市電に乗れば、中央ヨーロッパ各国の言語が聞こえてくる。トリエステのバーに入れば、イタリア語に交じってスロヴェニア語の会話が耳に入ってくる。そこに「中央ヨーロッパの可能性」をまだ見ることができるだろう。

### 主要参考文献

Bohadlo Stanislav(ed.), *Japonsko. Země, kterou jsem hledal*(Náchod; Vydal Gate Nachod, 2000).

Hynek, Alois, *hynek's Führer durch Prag und die Ausstellung*(Prag; Verlag von Alois Hynek, 1891).

Janatková, Alena, *Modernisierung und Metropole. Architekturstadt und Repräsentation auf den Landesausstellung in Prag 1891 und Brünn 1928*(Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008).

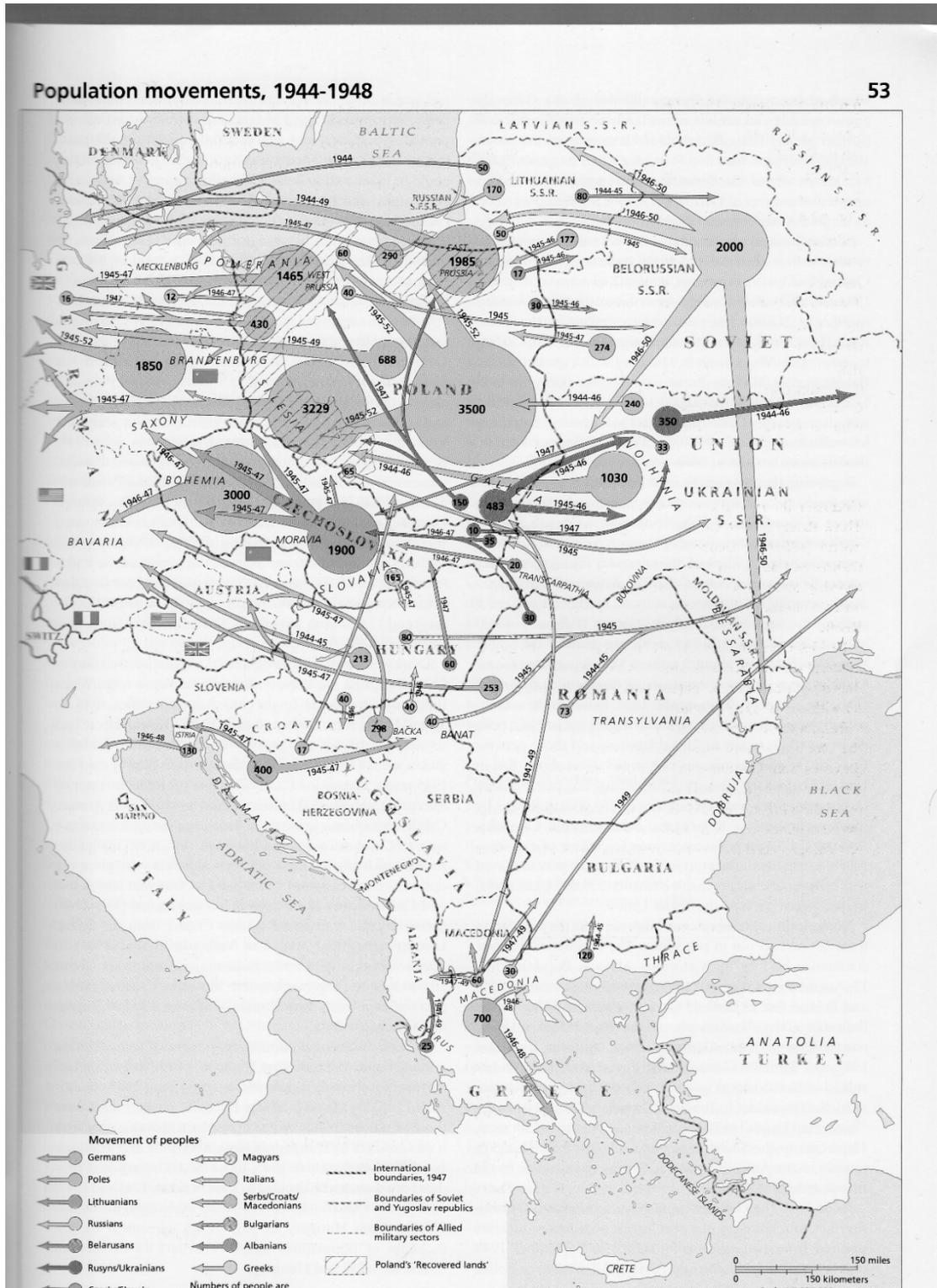
Magocsi, Paul Robert, *Historical Atlas of Central Europe* (Seattle: Univ. of Washington Press, 1993).

Magris, Claudio & Angelo Ara, *Triest. Eine literarische Hauptstadt in Mitteleuropa* (München: DTV, 1987).

Magris, Claudio & Angelo Ara, *Trieste. Un'identità di frontiera* (Torino: Einaudi, 1982). 大津留厚編著『中央ヨーロッパの可能性—揺れ動くその歴史と社会』（昭和堂、2006年）。

付記：本稿は、2015年11月7日に行われた学校法人城西大学・中欧研究所主催、フリードリッヒ・エーベルト財団共催のシンポジウム「中欧研究とその東アジアネットワーク構築に向けて」において同じタイトルで行った報告に加筆修正したものである。

図1 (1944年 - 1948年の住民移動)



出典 : Magocsi, Paul Robert, *Historical Atlas of Central Europe* (Seattle: Univ. of Washington Press, 1993), p.53.

図2 1900年ころの中・東欧ユダヤ人、アルメリア人の分布



出典 : Magocsi, Paul Robert, *Historical Atlas of Central Europe* (Seattle: Univ. of Washington Press, 1993), p.33.